

福島県浜通りの現状～はや 10 年を迎える現地を訪ねる

伊藤久雄（認定NPO法人まちぽっと理事）

J R常磐線が全線開通し、夜ノ森駅（富岡町）、大野駅（大熊町）、双葉駅（双葉町）が9年ぶりに再開した今年3月に大熊町を訪ね、大野駅の再開の様子を大勢のマスコミに混じて視察以来、約7か月ぶり浜通りを訪ねた。

10月26日にいわき市に一泊し、大熊町の木幡ますみ町議らと10年目を迎える大熊町をはじめとした浜通りのこれからについて語り合い、翌27日にいわき市から檜葉町、大熊町、双葉町を訪ね、夜遅く東京に帰るというハードスケジュールだった。今回は初めて富岡町議会の高野匠美（たくみ）町議にも案内いただいた。

■いわき市 いわき放射能市民測定室「たらちね」を訪問

最初にいわき市にある、いわき放射能市民測定室「たらちね」を訪問し、スタッフの鈴木さんから、「たらちね」の現状や課題についてお話を伺った。「たらちね」は2013年から子どもたちを対象にした甲状腺の検診、食品・水・土壌の放射能測定などを行っている。まだまだ線量は高く、廃炉作業の見通しも立たず、子どもたちの健康不安が続くことから、今後の活動がより一層期待されている。



機器が並ぶ測定室

実は筆者の自宅の庭の土壌の放射能測定を依頼したことがあった。お世話になっているのに、訪問は初めてだった。鈴木さんのほかのスタッフも20代から30代と思われる女性ばかりで、高齢化にあえぐNPO（例をあげれば、私も理事を務める府中かんきょう市民の

会は、平均年齢が 70 歳を超える)。

■ 檜葉町の商業施設「ここなら笑店街（しょうてんがい）」

檜葉町は震災時には 8,011 人の居住者がいた。現在は居住者数 4,023 人と居住者は約半数にまで戻っている（町民の帰還者のほか、新たな居住者をふくむ）。商業施設「ここなら笑店街（しょうてんがい）」は 2018 年 6 月にオープン。スーパーやホームセンターなど 9 店舗が入り、なかなかの賑わいだった。

ただ檜葉町居住者は高齢化が著しい。「ここなら笑店街」の 1 店舗は 11 月末で閉鎖することだった。木幡さんによれば、その店舗はカフェで、打ち合わせなどに利用できる個室も備えているのだが、コロナ禍の中で店舗のつくりが若者向けだったのが拙かったのではないかとのことだった（次に入店する事業者は決まっているとのことで一安心）。



ここなら笑店街（しょうてんがい）

■ 富岡町 居住者は被災前の約 5 %程度

富岡町の被災時の人口は 15,960 人だった。10 月 1 日現在の人口は 791 人。帰還者と新たな居住者を合わせても、被災前の約 5%に過ぎない。避難指示がすべて解除された檜葉町とは違い、避難指示が残り、福島第一原発に近い富岡町の現状は非常に厳しい。沿道には売り地の看板が目立つ。町には、廃炉国際共同研究センター、文化交流センター「まなびの森」、ふたば医療センターなどの箱モノが建設されている。

上記の施設のうち廃炉国際共同研究センターは昨年 11 月の開館、ふたば医療センターは平成 30 年（2018 年）4 月開院だが、文化交流センター「まなびの森」は町民が学習するための【生涯学習館】、学習活動の発表や催しのための【大ホール】、地域の歴史や生活文化

を次世代に伝える【歴史民俗資料館】からなる複合文化施設である。平成 16 年（2004 年）10 月に開館していたが被災、平成 30 年（2018 年）4 月に再開している。

しかし、廃炉国際共同研究センターやふたば医療センターは富岡町だけの施設ではないが、文化交流センター「まなびの森」は富岡町単独の施設である。人口が戻らないまま、施設の維持費はどうなるのか。心配はつきない。



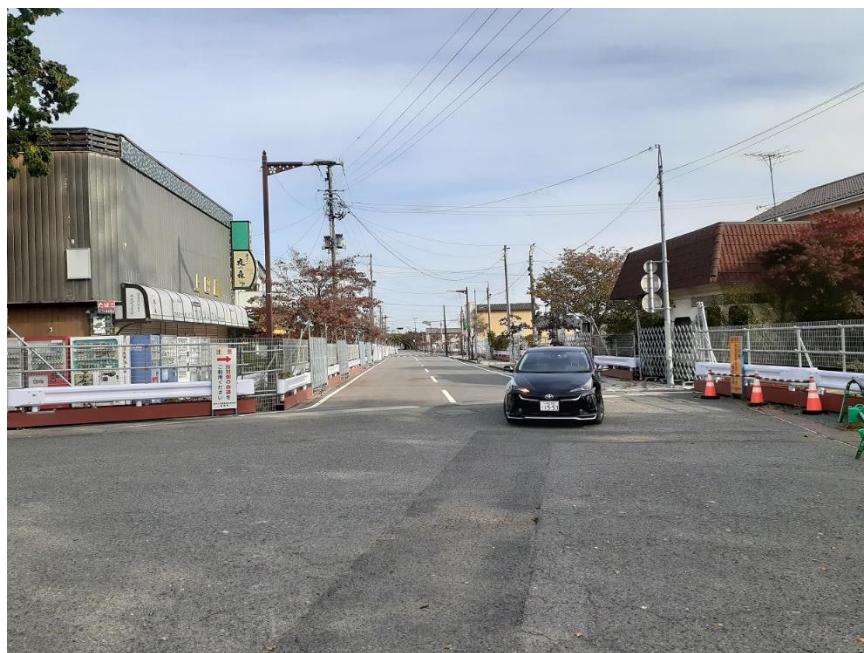
文化交流センター「まなびの森」（町の HP から）



幹線道路沿いには売地の看板が目立つ

■富岡町 夜ノ森駅は再開したが

夜ノ森駅は大野駅、双葉駅と同様、無人駅である。被災前でも乗降客は 400 人弱だった駅である。現在どの程度乗客がいるのだろうか。駅前の宅地は避難指示区域のままである。近くのリフレ富岡（温泉・プール・宿泊ができる一体型施設）は解体中で、規模を縮小し新たに建設する計画があるという。案内していただいた富岡町の高野町議は大赤字になる可能性に心を痛めていた。



バリケードに囲まれた駅前の宅地（避難指示まま）

■大熊町 大野駅

大熊町の被災時の人口は 11,505 人であった。現在（10 月 1 日現在）の町内居住推計人口 858 人であり、被災時と比較して約 7.5%程度となっている。ただし、元の町民は 269 人程度と少なく（帰還率 2.3%）、東電社員の社宅ができていることから、東電社員や廃炉・除染作業員が 600 人近く居住していることになる。駅前の線量計は $0,312 \mu\text{Sv/h}$ を示していた（大野駅構内の線量計は $0,172 \mu\text{Sv/h}$ ）。

大野駅前の広場は小さく、駅至近の住宅地は夜ノ森駅前と同様にバリケードに囲まれたままである。避難指示が解除されている大川原地区までは道路が避難指示が解除されているだけである。その大川原地区には役場のほか、災害公営住宅、町単独住宅（賃貸住宅）、高齢者グループホームなどのほか、上記の東電社宅などが建設されている。

しかし、町民の帰還者は 2.3%にとどまっている。しかも大熊町だけではないが帰還者は圧倒的に高齢者が多い。大熊町は、他の町と比較すると財政的には現在のところ良好であるが、このような状況の中で今後の財政状況にも楽観は許されない。大熊町長は小中学校の新設方針を変えていないのだが。



大野駅構内（奥に線量計が見える）



バリケードに囲まれた駅前の住宅地

■双葉町 双葉駅

双葉町は被災時の人口は 7,140 人であった。双葉町は J R 双葉駅東口の広場や東日本大震災・原子力災害伝承館と双葉町産業交流センターなどを新設した地区など、一部の避難指示が解除されたが、町はまだ帰還を認めず、したがって町民の帰還者はいない。



双葉駅前の駅前広場

▽ ▽ ▽

今回の訪問で明らかになったのは、帰還者（居住者）の多い檜葉町（といっても被災前の半分だが）と、帰還者（居住者）の少ない他町との違いである。ただし檜葉町といえども高齢化が深刻である。福島県浜通りの未来は見通し困難だというのが率直な感想である。